

共時性をめぐる謎

ユングと物理学者パウリの出会い

科学的認識の方法についての反省には
無意識の領域に関する経験まで考えに入れて行うべきとするユングは、
『易経』からの示唆を受け、共時性の考えを提案する

湯浅泰雄

共時性は心理学と自然科学の 関係の問題である

数年前から友人諸氏に協力をお願いして、ユングとパウリの往復書簡集「一九三二―一九五八」の翻訳を進めていたが、ほぼ完成し、近くBNP社から刊行の予定である。この書簡集および関連資料の編集はユングの弟子マイヤーの手で早く完成していたらしいが、一九九二年になってようやく刊行された。二人の没後実に三〇年以上たっている。英訳されるのも時間がかかり、刊行は二〇〇一年である。公表がこのように遅れた理由はわからないが、筆者は、この著作は非常に重大な内容と価値をもつものと感じている。

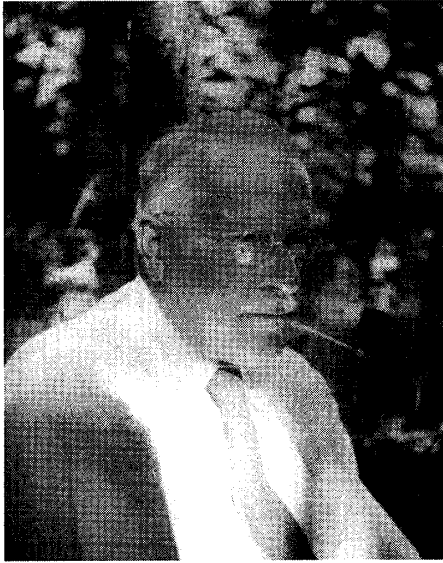
ユングとパウリは一九五二年に『自然の解明と魂(プシケ)』という題で共著を刊行している。この著作に収められた「非因果的連関の原理…共時性」というユングの論文は、いわゆる共時性(シンクロニシティ)の考え方についてのべたものとして有名である。パウリの論文は「元型的観念がケプラーの科学理論に与えた影響」という題で、ケプラーの宇宙観について論じた科学史の論文である。共時性にはふれていない。このため、共時性とパウリの関係が問題にされるようなことはこれまでなかった。われわれはまずこの点について考えを改める必要がある。共時性とは、まさに心理学者と物理学者の出会いの場においてその意味が問われるような性質の問題なのである。

まず共時性について理論的な観点から簡単に定義しておこう。共時性とは、自然科学の基本原則である因果性に対比される見方で、「意味のある(偶然的)一致」meaningful coincidence という意味である。これだけでは何のことかよくわからないが、ここには、人間の経験というものは、その経験主体の内部と外部の両方の観点から見る事ができる、という考え方が前提されている。たとえば夢や幻覚などイメージの形で経験される個人の内部心理における出来事と、その個人の外部(つまり自然環境内)で起こる出来事とが、その意味において一致するという事である。

ユングは最初の章でアメリカのラインによるESP(透視)の実験を取り上げ、この実験結果は科学的方法に基づく通常の因果関係では説明できないと述べ、これは共時性の一つの事例であると解釈する。たしかに、透視やテレパシーのような超常現象は、体験者にとって心理的内部経験と外的(物理的)出来事の間、「意味のある一致」が起こっている事例である、とすることができると。そうするとこの問題は、心理学と自然科学の間には未知の関係があるということの意味するだろう。

超心理学の波紋

ユングはこれにつづく次の章で、歴史的事例として占星術の実験例を取り上げ、さらに古代中国の『易経』の占いや道教の哲学をあげ、これらを西洋の古代哲学の例とともに共時性の哲学(考え方)の歴史



ユング

的先駆としている。しかしこのように雑然と歴史的
事実を並べ立てられたのでは、読者は筋の通った理
解をすることはできないだろう。ユングの弟子たち
の間でも、共時性についての評価は真つ二つに分か
れていて、これに全く意味を認めない人たちも多い。
ところがそれにもかかわらず、共時性の提案は、パ
ウリとユングが共に世を去った後、次第に人々の関
心と注目を集めるようになり、一九七〇年代には「精
神世界」とか「ニューサイエンス」とよばれる運動
が起つて、アカデミズムの学界ばかりでなく社会全
体に、超心理学がからんだいわゆるオカルト的論争
が流行するようになってきたのである。

まず一般社会では、大衆ジャーナリズムを舞台に
して「超能力」ブームが起つた（イギリスの超能
力者ユリ・ゲラーが来日してテレビに登場したのは
一九七四年である）。これに呼応して流行したニュー
サイエンスの運動では、心理学者に代わって物理学
者が主役になった。物理学者のピートは、一九七一

年ロンドンで有名な物理学者デヴィッド・ボームと
共同研究を行つてからユングの集合的無意識に関心
をもつようになり、ユングとパウリの関係を詳しく
調べた。³ピートの調査によれば、ユングに対して共
時性について発言するように強く勧めたのはパウリ
だったのである。

ユングはラインの研究に価値を認めたが、これを
そのまま受け入れたわけではなく、彼独自の的方法論
的（つまり哲学的）観点に立つてその意味をとらえ
直している。大事なものはこの点である。ラインは、
超常現象を実験心理学内部の問題に限定していた。
しかしユングは、この問題は集合的無意識の観点か
らとらえるべきであると考えた。そうすると超常現
象は、自然空間を超個人的集合的無意識の場として
とらえる見方をみちびくことになるだろう。物理学
者は果たしてこんなことを認めるだろうか。一方、
パウリがラインの超心理学研究を支持していたこと
は、ユング心理学について論じた彼の論文から物理
学者にはよく知られていた。⁴今回の往復書簡と関連
資料によれば、パウリは物理学者としての立場から
積極的に協力して、自然科学の認識方法と無意識の
心理学の関係を考えるという驚くべき構想を立てて
いるのである。空間を何らかのエネルギーの「作用
の場」と見ることは物理学者にとつては何でもない
ことだ、と彼は言っている。要するにこの二人によ
る共時性の提案は、科学による自然認識の方法と無
意識の領域にある人間の潜在能力の関係について考
えた最初の試みである、と言うことができる。これ
は次の時代の思想と学問のあり方に対して予言者的

意味をもった主張であった。

パウリの青春と悲しみ

理屈っぽい議論はここでひとまず中断し、次には、
読者があまりご存じないパウリの生涯と体験に注目
しながら話を進めよう。物理学に関連する部分は無
論専門家の解説の受け売りである。

パウリ Wolfgang Pauli (一九〇〇—一九五八)
の祖父ヤコブ・パツシエレスはプラハのユダヤ人社
会で有名な人で、作家フランツ・カフカの成人式
の司会をした人である。その息子でウォルフガン
クの父にあたる同名のウォルフガンク・ヨセフは
プラハで学んだ後、一八九二年にウィーンに移つ
てカトリックに改宗し、新しい姓パウリを選んだ。
一八九九年ベルタ・カミール・シュッツと結婚、翌
年息子ウォルフガンクが生まれた。この父はウィー
ン大学医学部の教授になり、有名な物理学者マッハ
を尊敬していたので、教会で幼児洗礼を受けるとき
の代父をマッハに頼んでいる（パウリの年齢は二〇
世紀の年数と同じなので、彼をめぐる事件と年齢の
関連をみるのには便利）。

幼少年期のことは省略して、一九一八年パウリは
ミュンヘン大学に入ってゾンマーフェルトから物理
学を学ぶ。一年後輩にハイゼンベルクがいた。卒業
後、彼は一九二一年から二二年にかけてマックス・
ボルンの助手としてゲッティンゲンで過ごしたが、
ニルス・ボーアと知り合い、その招待で一年間コペ
ンハーゲンのボーアのもとで研究する。翌一九二三



パウリ

年、パウリはゾンマーフェルトの弟子レンツの助手としてハンブルクの物理学研究所に勤務、この地で多くの新しい友人と交わり、名目だけが大学教授資格を得た。ハンブルクでの生活は以後六年に及ぶので、パウリは二〇代の青春時代をこの地で送ったと言ってよいだろう。この間、一九二五年に有名なパウリの排他原理 exclusion principle を発表している。これは原子核の周囲をめぐる電子の軌道遷移に関する法則で、彼が後にノーベル物理学賞を得たのはこの業績による。わずかに二五歳でこのような素晴らしい業績をあげ、パウリの名前は物理学界で一挙に知られるようになった。こうして彼は一九二八年、チューリヒ連邦工科大学 (ETH) の教授に招かれたのである。

表面的にみればこの時期のパウリの生活は順調だったようにみえるが、実は彼の身边には精神的危機が忍び寄っていた。チューリヒに招かれる前年(一九二七)、彼の母親が四八歳で服毒自殺した。両

親は既に早く離婚していたのだが、母親の死は彼にとって大きなショックを与え、彼の生活はすっかり乱れてしまった。

往復書簡集の中に、パウリが晩年の一九五六年にユングに宛てて書いた論文調の長い書簡69があるが、その中にハンブルク時代のことを記した一節がある。彼は当時の思い出にふれながら、自分の精神的状況について回想的に告白している。

「私はハンブルクにはもう長い間行っていないのですが、講演を頼まれたことから、私の名前と宿泊先のホテルの名前が新聞にのりました。このことがロマンティックな出来事をもたらしてくれました。三〇年前ハンブルクで知り合っていたが全く忘れていたある女性が連絡してきたのです。彼女を知っていたのはその若い少女時代です。彼女はモルヒネにおぼれており、やがて消息を絶ってしまったのです。一月二十九日の一七時、彼女は電話をよこし、私は一月一日に彼女と二時間を過ごしました。出会ったのは列車の駅で、私が帰るチューリヒ行きの寝台急行が止まっているホームでした。その二時間の間に、私の三〇年の全生涯が過ぎてゆきました。彼女はモルヒネ中毒から癒され、結婚し、そして離婚していました。時代の歴史的背景としては、あの戦争とナチズムとがありました。……三〇年前、私の神経症は女性関係において、昼の生活と夜の生活の完全な分裂にはっきりと示されていたのです。……チューリヒに帰る急行列車の中で、私の心はただひとり一九二八年に戻っていました。私は当時(チューリヒでの)新しい教授職とあのすさまじ

い神経症へと、この同じ道を向かっていたのです。」

孤独な魂

一九二八年、パウリはチューリヒ連邦工科大学で理論物理学の講義を始めたが、準備不足で学生を感させた。翌一九二九年の暮れ、彼はベルリンでダンス学校の若い演技者ケート・デブナーと結婚したが、一年もたずに離婚した。ピートによれば、彼女は三流のキャバレー歌手で、結婚して数週間で彼を捨てて家を出てしまった。ケートはベルリンで暮らし、ハンブルクにはほとんどいなかったようである。パウリはタバコを吸い、大酒飲みになり、酒場で喧嘩して叩き出されるような生活を送っていた。心配した父親が同じチューリヒ連邦工科大学にいたユングの治療を受けるようにすすめたのである。⁴⁾

ユングは最初若い駆け出しの女医エルナ・ローゼンバウムに命じて、パウリと面接してその夢についての詳しい報告を提出させた。パウリの報告は詳細で綿密な内容のものであったようである。ユングはそれらの夢を分析し解釈してから後に初めて面接している。治療は一九三〇年から始められ、一九三四年に終了した。この年パウリはフランカ・ベルトラムと結婚、彼女は彼の人生を最後まで見届ける相手となった。往復書簡は治療が峠を越えた一九三二年から始まっている。ただし、学者としての表面の経歴を見ているだけでは、パウリがこの時代にこのようなすさまじい精神的危機を経験していたとはとても思えない。彼は一九三〇年から翌年にかけて、ニュー

トリノの存在を予言する有名な理論を完成しているのである。

医師と患者としてのユングとパウリの関係を示す記録としては、ユングの晩年の大著『心理学と錬金術』（二九四四）がある。この本の第二部はあるインテリ患者の夢や幻覚を集めて分析したと記されているが、今ではこの患者がパウリであることが明らかになっている。ユングの錬金術研究はパウリ自身が残した夢の記録なしにはあり得なかつたらう、という感が深い。

パウリの手紙の中には、時々、内心の孤独な思いを告白した印象に残る文がある。一九三四年の書簡30に、彼はクラウス師記念教会を訪れたときの印象を記している。クラウス師 Bruder Klaus (Nikolaus von Flue, 一四一七—一七八七) というのは中世の有名な修道者で、スイスの守護聖人に定められている人である。

「私はクラウス師の会堂を長い間訪れ、そこに掲げられた絵画を見ました。それは彼の見たヴィジョンを示したものでした。私はすっかりそれらに魅了され、それらとの直接的なつながりを強く感じました。彼の生涯は、彼が家族を捨てて荒野に入ったときに全く転倒してしまいました。そして彼は三位一体についての特殊な幻像を見るのですが、それは彼に恐怖の驚きを与えました。……彼は何か世界の終末のようなヴィジョンを見たに違いありません。三位一体との関係は、私には全くよく理解できるのである。というのは、私もかつて夢で三位一体が三拍子のリズムに変わること（世界時計）を経験したこ

とがあるからです」

この世界時計のヴィジョンというのは『心理学と錬金術』第二部第三章にみえる「宇宙時計の幻覚」を指している。この箇所についてユングは次のように記している。

「この夢は夢見者（パウリ）に非常に深い、いつまでも心に焼きついて忘れることのできない印象、夢見者自身の表現を借りれば〈調和の極致〉の印象を与えた」⁵⁾

パウリ効果

ピートによると、ユングが共時性について少しづつ発表するようになったのはパウリの勧めによるものだという。ピートはこのことに関連して、物理学者たちの間で語り草になっている「パウリ効果」についてのべている。パウリ効果のことは彼について必ず語られる有名な逸話であるが、ここではパウリの身近にいた弟子フィルツの文を引用しておこう。

「まったく観念的でない実験物理学者でさえ、奇妙な効果がパウリから生じることを確信していた。例えば、彼が実験室に在るだけであらゆる類いの実験的災難（実験装置の故障など）が起る。彼は人をベテンにかけると信じられていた。これが「パウリ効果」であった。そのため、有名な分子ビームの芸術家であり親友でもあったオットー・シュテルンは、絶対にパウリを彼の研究室に入れなかった。これは決して単なる伝説ではない、私はパウリとシュテルンのどちらをも良く知っているのだ！パウリ

自身、すっかりその効果を信じていた。彼は一度私に次のように語ったことがある。ある時彼は、災いの前兆を不快な緊張感として感じ取った。そしてその瞬間、彼が予見した災難が実際……他の人物を……襲った。そして奇妙にも、彼は解放され荷が軽くなるのを感じた。パウリ効果をユングが考案した共時的現象として理解すると大変道理にかなっているように思う。⁶⁾

パウリ効果を共時性として理解するというフィルツの意見は、これは明らかにラインのいう超常現象であるという意味である。本人は自覚していないのにPK（念力）が無意識のうちに発動した、ということであろう。

ユングが超心理学研究を知ったのは、一九三四年にラインがその著作『超感覚的知覚』"Extra-Sensory Perception"を送ってきた、ユングが若いころ経験した超常現象について公表してほしいと求めたためである。ラインは、このような現象は実験心理学の研究対象となる一般性のある経験だと主張したのである。それから二人の間で手紙の往復が始まる⁷⁾が、ユングはこういう現象は無意識の観点から考察すべきだという考えをもつようになる。ユングはラインの研究を知ってから、超常現象と物理現象の間には無意識領域のはたらきを介する独特な、つまり心理学的であると同時に物理学的な意味をもつ現象が起こっている、と考えたのである。同じ一九三四年のパウリ書簡7によると、ユングはパウリに対して心霊現象に関するエッセイを送り、超常現象について研究している物理学者を紹介してほしいと依頼し、

パウリはヨルダンという学者を紹介している。パウリ自身は当初超心理学には無関心だったが、ユングの関心の内容を知ってから、次第に彼自身の経験するパウリ効果について考え始め、ここには科学的認識に関する重要な方法論的問題があると感じるに至ったのである。一九四八年の日付のある往復書簡34の初めの部分にパウリは次のように記している。

「ちょうどユング研究所設立の際に、花瓶をひっくり返す面白い「パウリ効果」が起こったので、私は（あなたから教わった象徴的言い回しで言えば）内部にたまった水は空っぽにしななければならない、という直接的で生き生きとした印象を受けました。心理学と物理学の間の関連はあなたの話の比較的重要な部分を占めているので、私には、自分が何をなすべきかということがますます明らかになってきました。」

つまり心理学者ユングと物理学者パウリが共に超常現象の体験者だったために、ラインの研究は、心

理学と物理学の間にはどういふ関係があるかという哲学的な方法論的課題を引き出すことになったのである。

●注

- (1) "Wolfgang Pauli und C. G. Jung, Ein Briefwechsel 1932-1958", hrg. C. A. Meier, Springer, 1992. ("Atom and Archetype: The Pauli/Jung Letters 1932-1958", ed. by C. A. Meier, Princeton U. P., 2001.)
- (2) ユング／パウリ（河合隼雄・村上陽一郎訳）『自然現象と心の構造』海鳴社、一九七六。
- (3) ピート（管啓次郎訳）『シンクロニシティ』サンマーク文庫、一九九八。
- (4) パウリ（エンズ／メイン編、岡野啓介訳）『物理学と哲学に関する随筆集』第17章「自然科学的認識論的立場からみた無意識という概念」シュブリンガー・フェアラーク東京、一九九八。

- (5) ユング（池田紘一・鎌田道生訳）『心理学と錬金術』I二七三頁人文書院、一九七六。
- (6) エンズ「ウォルフガング・パウリ・伝記的序説」（上記の文献4所収）。
- (7) 『ユング超心理学書簡』（湯浅泰雄訳）白亜書房、一九九九。

●編集部注

〔1〕監修者の死により翻訳・編集作業が中断していたが、現在編集を続行中である。

※本稿は『地球人』No.5初出、『湯浅泰雄全集第16巻』『気の科学』所収（共にビーイング・ネット・プレス刊）の再録である。

ゆあさ・やすお

一九二五年生まれ。東京大学文学部卒業。文学博士、経済学修士。人体科学会会長、大阪大学、筑波大学、桜美林大学等各教授を歴任。著書に『身体論』『日本人の宗教意識』他多数。『湯浅泰雄全集』が二月に完結。二〇〇五年一月九日逝去。

人体科学会第23回大会予告

大会テーマ「旅とスピリチュアリティ」
 会期：2013年11月30日（土）、12月1日（日）
 会場：香川大学経済学部（高松市）
 大会会長：大賀睦夫（香川大学教授）
 事務局：香川大学経済学部大賀研究室

760-8521 香川県高松市幸町1-1
 電話 087-832-1924（研究室直通）

●編集後記

昨今の世の中の動きをみてみると、iPS細胞の研究でノーベル賞を受賞された山中伸弥教授の活躍がある一方、科学者の指摘や警告があつたにもかかわらず、科学に対する無知・無理解から社会システムが起動できずに大災害を引き起こし、その傷を広げてしまったという感が否めません。そこで今回は、理科系の好奇心や創造性が今、何に向かつているかを特集しました。「意識と時空」という大テーマにそれぞれの立場から真摯に取り組み、新しい時代を切り拓いていく力を感じていただけたらと思います。

今回はまた、時には湯浅泰雄先生の言葉を載せてほしいという希望に答え、全集からユングとパウリの対話についての一部を収録しました。湯浅先生が哲学から広い分野を見渡し、明晰な洞察をされているのに改めて感心します。先生の高い見識と自由な精神を今、とても懐かしく思い出します。

（木戸）

Mind-Body Science No.23

発行日 2013年3月31日
 発行 人体科学会
 101-0061 東京都千代田区三崎町3-1-11 瀬川ビル3F
 電話/FAX 03-3222-5040
 E-mail jintaikagaku@smbs.gr.jp
 URL http://www.smbs.gr.jp/
 編集長 木戸真美
 編集委員 大賀睦夫・倉澤幸久・小久保秀之・丸山敏秋
 協力 ビーイング・ネット・プレス／山田孝之